



午後8時半。大分大学経済学部1年のバイト生4人が膝を突き合わせた。スタッフ5人も同じテーブルを囲む。  
大分市数戸西町の子ども食堂「すみれ学級」を今後どう運営していくか。話し合ったのは2月中旬の金曜日だった。  
「集まる児童が増えて食事の準備もままならない。收拾もつきにくくなっている…」  
週3日、いずれも20人以上の小・中学生を迎える。さらに増えた場合はどのように対処すればいいのだろう。年度が変われば、環境の変化で訪れる子どもが急減したりしないか。  
先が見えず、沈黙が流れた。

長崎県杵岐市生まれの富場美咲(19)は、後期終盤の1月初旬から「すみれ学級」のバイトに加わった。地域社会の課題を探



子どものために何をすべきか。スタッフとバイト生を話し合った大分市数戸西町

## 私、必要とされている



富場美咲(右)と山下大河

る連携授業のフィールドワークがきっかけだった。  
積極的な自分に今、少し驚いている。「子ども食堂で働くなんて思ってもいなかった」  
人口2万8千人の杵岐島を離れて1年がたつ。初めての島外生活、初めての1人暮らし、初めての自由。少しは「社会」で成長できたかな、と思う。  
「世の中の役に立ってる大人になりたい。ここでバイトはすつと続ける予定です」

すみれ学級は調剤薬局会社(大分市)が運営している。食事と学習指導は無料。誰が来てもいい。規則を厳しく問わない分、自由が過ぎる面もある。  
後期、大分大生は連携授業で学級運営の改善策を考えた。

「議論の中でも『自由過ぎる』との指摘は多かった」。長崎県新上五島町育ちの山下大河(19)は、他のバイト仲間にも「難しいけど何とか解決していかないと」と行動を促した。  
食堂開設時の昨夏から中学生に勉強を教える。「今の子は皆スマホを持っている。僕らの時代と価値観が違う。そのことを間近で知るの面白」

将来、法曹界で働きたい。社会のありようを「多面的に1年間勉強できた」ことで、夢はより明確になった気がする。  
「これから何をすべきか、自分なりの目標が定まった。連携授業で『考える』ことの基礎を学べたおかげかな、と」

1時間が過ぎた。  
「大分大生が授業で提案してくれた改善策は可能な限り実施していく。いろんな問題があるが、ともあれ君らバイト生には期待しています。すみれ学級の現場責任者、榎田雅文(64)は学生たちの顔を見回した。  
私は必要とされている。  
僕を求めている子もいる。仲間と「いま」を頑張ろう。4人はマフラを巻くと、背中を丸めて大学近くのアパートに帰って行った。  
もうすぐ春が来る。